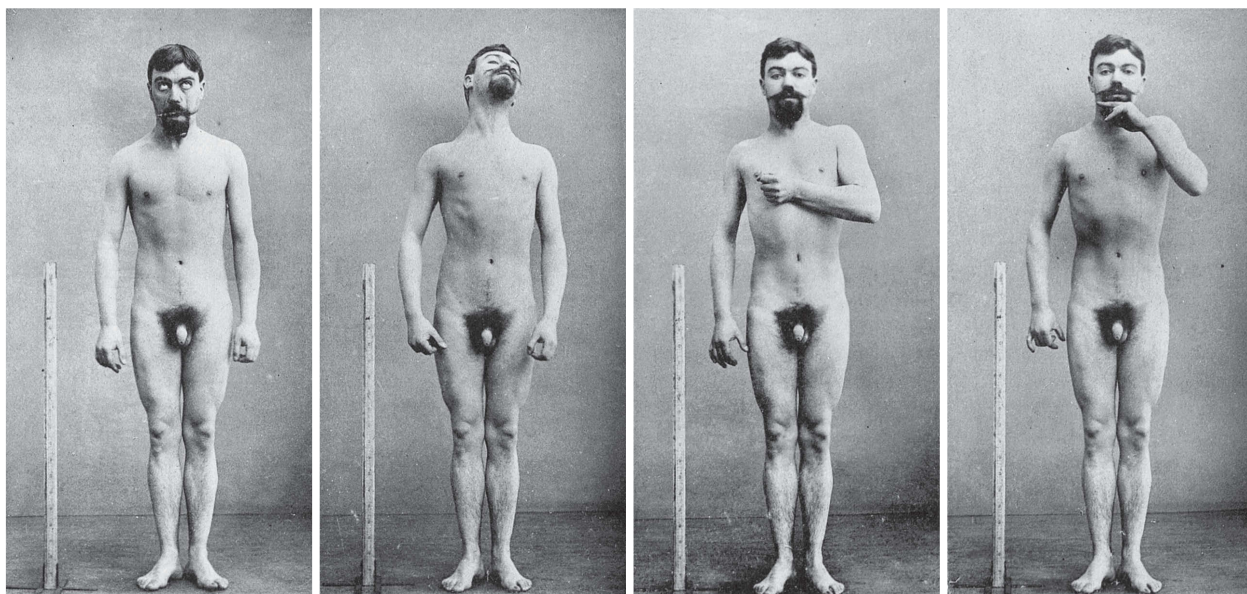




A

B

C

D

BRAIN and NERVE 69 (1) : 92-93, 2017

今月の表紙

河村 満^{a)}*

岡本 保^{b)}

菊池雷太^{c)}

今月の表紙は、「チック病の1症例の進行における図像研究」¹⁾というルビノヴィッチ (Jacques Roubinovitch ; 1862-1950) による論文からの写真です。一見すると連続写真のようにみえますが、何をどんな意図で写したものののでしょうか。

本症例の臨床観察の意義は、本人の周囲の証言によって裏づけられた正確さで、チックの10年来の進行を時系列のとおり写真として残せたことにある。同様に、この症例は治療の観点からも興味深いかもしれない。というのもこの患者は、患者自身の意志がチックの運動を必ずし

も消失させるわけではなく、さらに秩序、方法、理論的方向性、休息、定期的なリハビリテーションなどの追加処理なしで意志を働かせれば、チックに変容や進展が生じることを示しているからである。

つまり、この一連の写真は10年間にわたって変遷したチックの徴候を1つ1つ収め、発症順に並べたもののようです。しかし、写真を見ると患者に経年変化はみられず、一時期に撮られたものにみえます。論文の本文を読み進めてようやくわかったのですが、この患者は後述するように、発症から10年後それまでに発現したすべてのチックが増悪して出現します。今回の写真はこのときに撮影されたのだと思われ (残念ながら論文中に写真の撮影時期については言及がありません)。

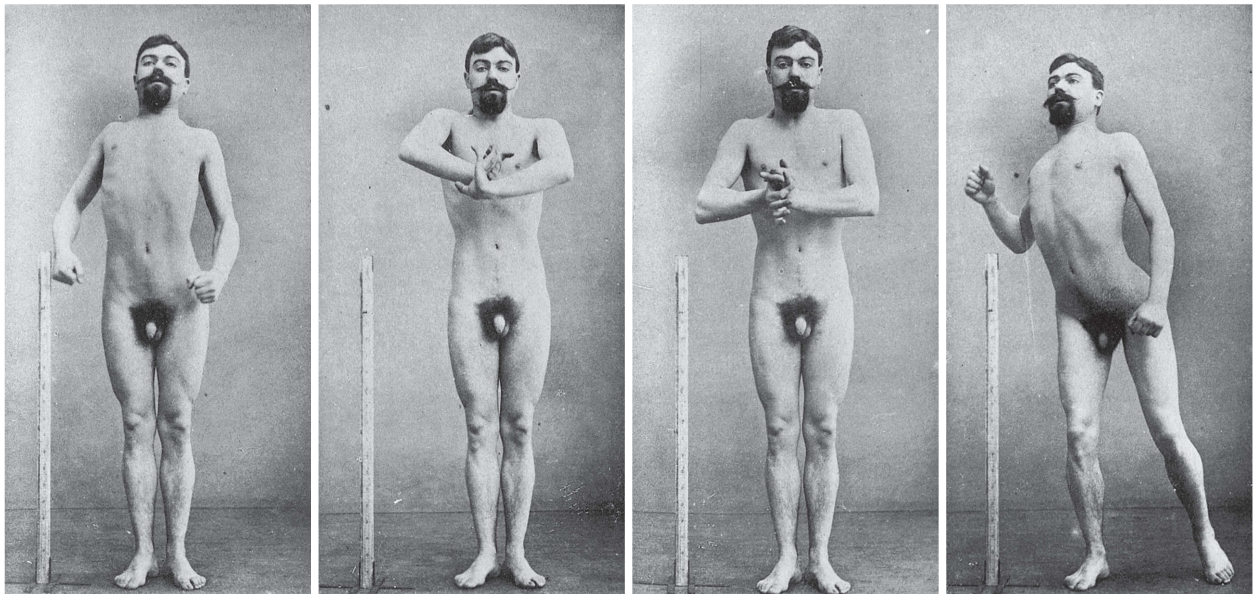
チックという言葉は古くは顔面の異常な運動を総称しました²⁾。短く、速い不随意運動で急に始まり、常同的で、シャルコー (Jean-Martin Charcot ; 1825-

1893) は「自然な行為の誇張画 (caricature d'acte naturel)」と表現しています^{3,4)}。発症は通常、幼〜小児期に始まり、男児に多く、家族性のものも稀ではありません。模倣、まばたき、鼻鳴らし、歯ぎしり、吃音、肩すくめ、音声チックなどを単純チックと呼び、これらが組み合わさったものを複雑チックと呼んで区別します。

チックの経過は極めて気まぐれで、長い期間寛解が続いたかと思うと、再発して寛解が中断されることがあり、それにはしばしば心理的要因が働いています。今回の一連の写真は、このことをうまく捉えています。患者の経過とともにみてみます。

Aの写真は患者が12歳のときに初めて生じたチックです。「1894年、腸チフスの回復期もしくはその直後、明らかな原因なく、並外れて大きく目を見開き、唇を閉じ、顎をずらすことからなるチックが出現」します。このチックは当初稀にしか起こらなかったのですが、自ら生じないように強制す

a) 昭和大学病院附属東病院, b) 富坂診療所, c) 汐田総合病院神経内科
* [連絡先] kawa@med.showa-u.ac.jp



E

F

G

H

ると「頸部の伸筋の収縮」が出現します。Bの写真がそれです。

その後、彼は学校においてチックのことでいじめに遭い、チックを抑える努力を強いられます。しかしながら皮肉なことに1899～1901年にはチックを抑えように行った運動がそのままチックとなってしまいます。それは「左手首で心窩部を擦り《わが過ちなり》(訳註: mea-culpa; カトリック教会のミサの冒頭に唱えられる言葉)という文句を永遠に繰り返す1人の男の体位を示す場合と、……左手の中指で額や顎を素早く擦る動作」で、CとDの写真です。

1902年に学校を卒業すると、しばらくチックは治まります。しかしその翌年、兵役に就くと新たなチックが出現しそれが2年間続きます。「訓練以

外のときにしばしば、彼は突然両肩を挙上し、硬くし、後方に投げ出すと同時に、少し頭部を後方に反り、軽く上肢を屈曲し、全体としてプロシア兵の硬く突っ張った体位をとる」。Eの写真です。

1904年、軍隊から戻った彼は保険会社に入社しますが、これまでに発現したすべてのチックがこれまで以上に顕著となり、2年の間隔で3つの新たなチックを合併します。「手首を互いに擦り合わせ; 両手の指を曲げたり、絡ませたり」(FとGの写真)、「走り出す男を想起させる身体全体を捻った体位」(Hの写真)、「背中の回転; 腰部の運動; 両腕、両下肢と頸部の伸張; 鼻と目を擦る動作……」です。

写真として掲載されているのはここまでですが、患者はチックが続いてい

るのにもかかわらず休息と定期的な治療を「時間の無駄」として拒絶しており、自分の意志の力で止めようとするばかりのため、「予後は厳しいと思われる」と本論文は結ばれています。

チックを呈する疾患として最も有名なのは、1885年のジルドラトゥレット(Georges Gilles de la Tourette; 1857-1904)が報告したことで、彼の名が冠されることになった症候群です³⁾。ジルドラトゥレットは9例を報告し、そのうち5例に汚言(coprolalie)、4例に反響言語(écholalie)がみられ、これを指摘した彼の業績は高く評価されてきました。なお、表紙の症例は汚言および反響言語はみられず、ジルドラトゥレット症候群ではないと記載されています。

文献

- 1) Roubinovitch J: Iconographie de l'évolution d'un cas de maladie des tics. Nouv Iconogr Salpêtrière **19**: 289-293, 1906
- 2) 平山恵造: 神経症候学 改訂第二版II. 文光堂, 東京, 2010, p613
- 3) Rondot P, Bathien N, Ziegler M: Les Mouvements Anormaux. Masson, Paris, 1988, p171
- 4) 【3】の訳本】平山恵造, 間野忠明(訳): 不随意運動. 文光堂, 東京, 1990, p178
- 5) Gilles de la Tourette G: Étude sur une affection nerveuse caractérisée par de l'incoordination motrice accompagnée d'écholalie et de coprolalie (jumping, latah, myriachit). Arch Neurol (Paris) **9**: 19-42, 158-200, 1885